

ヒトラー

ゲオルク・エルザー（36歳の平凡な家具職人）
エルザ（ゲオルクの元婚約者）／カタリーナ
アルトゥール・ネーベ（刑事警察局長）／ブル

・クリスティアン
・クラウス

ナー
ネリア・コンドゲン

ルートヴィヒ・エルザ
2015年・ドイツ映画
配給／ギャガ

ヒトラーと誕生日が数日違うだけ
ンの独裁者』（40年）で痛烈なヒ
計画」には一切無関係。インター

未遂事件はたくさんあるが、歴史上有名な「ヒトラー暗殺計画」は、トム・クルーズ主演の『フルキューレ』（08年）（『シネマーム22』115頁参照）で描かれた「フルキューレ作戦」。

これは、ナチスの軍人でありながら「反体制派」の1人となったシュタウフェンベルク大佐を中心とする組織的か
4年7月20日に実行された。そして、プラスチック爆弾

する会議の席で爆発したものの、結果的にヒトラーは軽傷で終わったが、ウフェンベルク大佐らの計画は失敗に終わった。その詳細とスリリンクらに日本の軍部とナチスの軍隊との相違点等については、『シネマリー

<もう1つの暗殺未遂事件は、単独犯！>

「フルキューレ事件」はナチス内部の「反体制派」の上級幹部が謀叛を企てて実行したものだが、本作が描くもう1つのヒュルガーブロイケラーの爆破事件」は緻密に練り上げられたものだ。

だが、何と単独犯！
1923年11月8日に、ミュンヘンにある大きなビアホールで、いわゆる「ミュンヘン一揆」が起きたことは有名

れに失敗した若き日のヒトラーは逮捕され刑務所に収容され、の勉強がその後の「ナチズム思想」を固めることになった。33年にナチス党の総統としてナチス政権を樹立したヒト

「ヘン一揆」を記念して、毎年11月8日にこのビュルガーハウスをもち、そこで演説をするのが恒例となった。そこに目撃者であるゲオルク・エルザー（クリスティアン・フリードリッヒ）

トラーの暗殺計画は、1939年
での記念集会で講演するヒトラー¹
の中に仕掛けるというものだった

ホントに
の？彼はど
計画を実行

目を離すことなくなるはずだ。

私はこの原稿を終戦記念日の8月15日に書いている。戦後70年の節目となつた2015年の夏は『日本のいちばん長い日』（15年）をはじめとする「戦争映画」がたくさん公開されているが、ドイツでは「ヒトラー映画」がたくさん作られている。『フルキューレ』はドイツ、アメリカの合作で、主役のトム・クルーズが英語で喋る違和感をどうしても拭えなかつたが、アカデミー外国語映画賞にノミネートされた『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）はすばらしい映画だった（『シネマーム8』292頁参照）。また、私はTVでしか観ていないが、マルク・ローテムント監督の『白バラの祈り ゾフィー・ゾル、最期の日々』（05年）もすばらしい映画だった。しかし、本作の監督は、その『ヒトラー～最期の12日間～』を監督したオリヴァー・ヒルシュビーゲル。そして、本作の脚本は、その『白バラの祈り ゾフィー・ゾル、最期の日々』の脚本のフレッド・ブライナースドーファーだから、まずはそれに注目！

さらに、ヒトラー映画ではないが、ドイツのミヒヤエル・ハネケ監督の『白いリボン』（09年）は私が「パルム・ドール賞受賞も当然！」と書いたすばらしい映

画だった（『シネマルーム26』200頁参照）。そして、同作で31歳の教師役を演じたのが、本作でゲオルク・エルザー役を演じたクリスティアン・フリーデルだから、それにも注目！本作のプレスシートでは「ヒトラーが最も恐れた暗殺者は、平凡な家具職人だった」、「この“平凡な男”、暗殺者か救世主か、それとも一。」と書かれているが、クリスティアン・フリーデルが演じる36歳の男ゲオルク・エルザーは本当に平凡な男・・・？

されに。私は、テレビに映る映像を見ていたところ案の定、中国政府はその行 8名と発表している。しかし、かつての

そこまで信用していいのやら・・・。ゲオルクが仕掛けた爆弾の威力はそれには及ばないものの、それでも集会の参加者 7 名が死亡、 63 名が負傷するというすごい爆発だった。

そんなシーンをスクリーン上に映し出せば、それはそれで生々しい映像になるが、本作ではあえてそんな映像は見せず、爆発の様子は観客の想像に委ねている。また、冒頭のシークエンスでこの爆発事件の犯人としてゲオルクが逮捕されてしまうので、本作は爆発事件の犯人は誰か？というミステリー性は薄い。したがって、そんな観客の期待は裏切られることになる。しかし、本作が描くのは約 1 ヶ月間にわたって綿密に爆弾を仕込んだ熟練した技術と、練りに練った計画性でヒトラーの暗殺に臨んだゲオルクの人物像。この男の正体はナニか、ということだ。

ら、その爆発の規模の大きさがわからうというのだ。ゲオルクの出身地であるヴュルテンベルク地方の静かな田舎町ケーニヒスブロンでは、既にゲオルクの身内が逮捕されベルリンに送られたが、その中にはゲオルクの元婚約者のエルザ（カタリーナ・シュットラー）の姿もあった。

ゲオルクの尋問にあたるのは刑事警察局長のアルトゥール・ネーベ（ブルクハルト・クラウスナー）と、秘密警察ゲシュタポ局長のハインリヒ・ミュラー（ヨハン・フォン・ビュロー）の2人。彼らの尋問の主たる目的は、ゲオルクの背後関係を暴くことだ。これだけ計画性のある暗殺未遂事件を田舎の家具職人に過ぎないゲオルクが単独で実行できるはずがない。共産党員の友人もたくさんいるゲオルクは、何らかの政治的立場からヒトラーの暗殺を？ すると、それを命じたバッくは一体誰？ それとも、ひょっとして彼はイギリスのスパイ？

ゲオルクは当初名前も語らない「完全黙秘」の姿勢を見せていたが、拷問だけではムリとみたネーベとミュラーの知恵によって、ゲオルクの態度いかんではエルザに危害が及ぶかもしれない姿勢を見せると、意外にもろくゲオルクは屈服。以降スラスラと犯行の手口と、そこに至る準備状況を供述したが、それはすべて単独犯であることを前提としたものだったから、ネーベとミュラーはイライラ・・・。

「関係を自白させろ」と厳しく命令が下されたが、そう言われても・・・。爆弾の起爆装置を現実に作らせ、それを学者に検証させてみても、ゲオルクの単独犯の可能性が強まるばかりだ。本作中盤に詳しく描かれるそんな尋問風景は非常に興味深いので、それに注目。

ちなみに、本作では次第にゲオルクの単独犯説に傾注していったネーベがナチス上層部からの命令に苦悩する様子が描かれるが、このネーベは対ソ戦ではユダヤ人殲滅部隊の指揮官となつたが、その後、反ヒトラー抵抗運動に参加したらしい。その結果、ネーベは1945年3月21日、「反逆者」として縛り首になってしまったそうで、本作でも最後にそのシーンが登場する。ゲオルクの尋問の中で、この刑事警察局長ネーベの心が揺れ動くサマも、本作の見どころの1つとして注目したい。

人という意見と、彼はヒーローという意見に分かれるはずだ。

梶上等兵とゲオルクの両者に共通するのは、何よりも自由を愛していること。したがって、その自由を束縛されることを嫌うし、何よりも権力者が権力や暴力をもってそれを抑圧することに対する拒否反応が強い。普通の人間も、もちろん自由を抑圧されることはイヤだが、反抗すれば権力によって捕らえられ、虐待されることがわかると、誰かが何らかの行動をとり、変えてくれるだろうと勝手に希望的観測をし、日和見主義的になるものだ。その結果、反抗を諦め結局権力に追従することになってしまうわけだ。

そんな視点で考えると、本作に見るゲオルクのヒトラーに対する反発心と、逮捕された後の拷問に耐えるゲオルクの強さの源泉は、あくまで自由を愛するという個人的な志向性にあると考えられる。つまり、決して仲間や組織、そしてイデオロギーに依拠しているのではないわけだ。ゲオルクのそんな個人の志向性を優先する姿勢は、今は他人の妻になっているエルザとの間で展開される「不倫の恋」にも見られるので、そんな「自由な生き方」とも対比しながら、ゲオルクの強さの源泉とは何かということについてしっかり考えたい。

時の権力者の暗殺計画は、世界の歴史上たくさんある。日本の戦国時代には暗殺を恐れた武田信玄の「影武者」なる者が登場したことは、黒澤明監督の『影武者』（80年）を観ればよくわかる。山本薩夫監督が村山知義の『忍びの者』（62年）を原作として映画化した『忍びの者』（62年）でも、また、篠田正浩監督が司馬遼太郎の『梶の城』（59年）を原作として映画化した『梶の城』（99年）でも、時の権力者・豊臣秀吉を暗殺するため伏見城に忍び込んだ石川五右衛門や葛籠重蔵の生きザマと、その行動原理が描かれていた。確かに、この石川五右衛門も葛籠重蔵も個人の志向性が強かったが、この2人はあくまでその道のプロ。したがって、本作に観るゲオルクのような一般市民（家具職人）が、たった1人だけでここまで見事な暗殺計画を立て、実行したケースは世界の歴史上稀だろう。

＜これはテロ？それとも英雄的行為？その判断基準は？＞

それについては、プレスシー卜にある鳥飼行博氏（東海大学教養学部教授、経済学博士）の「ゲオルク・エルザーのヒトラー暗殺計画」によると、まず、「戦後、東西にドイツが分裂した冷戦の時代、エルザーは、西ドイツでは共産主義者の偏屈なドイツ人とみなされた。東ドイツではドイツを解放したのはソ連赤軍であり、エルザーは無視された。冷戦が解消され、ドイツの再統一がなる1990年以降、エルザーをイデオロギーから離れて見直すことができるようになった」そうだ。ところが、「エルザー復権署名運動は1993年に始まり、『ゲオルク・エルザー広